

日向古代史の諸問題

日 高 正 晴

日向の国は、古来、皇祖にゆかりのある建国伝承発祥の地として、大和王国成立の過程の中では、極めて重要な関わり合いをもつ地域といわれてきたが、津田左右吉氏などを中心とする批判論説（『日本古典の研究』上）などによつて、現在においても、十分な説明が進まないままになっている。

私は、これまで、実証史学としての考古学を主眼にしながら、文献史的考察にも重点をおいて、日向古代史の究明を続けてきたが、その中でも、『古事記』、『日本書紀』の巻頭に記載されている日向神話については、極めて関心を寄せるところである。

そして、日本の建国神話の中で最も中核をなす日向神話が、なぜ日向の地に形成されたのか、また、一方、その歴史的投影として、われわれは、日向の大古墳文化の存在も

取り上げなければならない。

この日向の大古墳文化は、今日、畿内地方を除くと、日本では最大級の大古墳群地帯が形成されているわけであり、しかも、その古墳群の中には、前方後円墳が約一六〇基も分布している。

それで『記・紀』所載の日向神話と大古墳文化の存在は、古代日向文化の特色として、二本の大柱ということになる。それでは、大和王国が形成されるに際し、関わりの深い古代日向国について、これまでに考究してきたことを、以下、試論として述べてみることにする。

一、日向神話の歴史的背景

日向神話は、日本神話の根幹をなすものであるが、内容的には、大きく三つの項目に区分することができる。まず

最初に、天孫降臨伝承、次に、日向三代の伝承、そして、多少歴史性にまつわる神武東征説話などをあげることができるとする。

ところで、この日向神話も民族学的に大きく分けると、北方系と南方系の二つの説話に分類することができるのであるが、かつて、岡正雄氏が、この神話的信仰儀礼に関して、北方系を垂直的神観念、また、南方系を垂平的神観念（『図説日本文化史大系、一九六五』）と説かれた。すなわち、北方系は、神が天から下り、また上る信仰であるが、南方系は、神が、海上遙か寄り来る信仰である。

この場合、日向神話は、どちらかといえば、後者の南方的な海洋信仰の方が主体性をもっているように思われる。なぜだろうか、それは、日向の国の地理的立地条件によるのではないかと推察される。フィリピンの北で起った黒潮海流は、南西諸島を通り、真正面から当る所が、宮崎の日向灘沿岸である。黒潮本流によって、もたらされた南からの黒潮文化の交流によって、海洋性の強い日向神話の基盤づくりがなされたと思われる。

このように、黒潮が寄せる日向灘沿岸には、江戸時代でも、中国船などの漂着が多く、高鍋藩などは、海岸の遠望できる台地上に遠見係を居住させ、年中、海上の監視を続けた。それから、この黒潮の速さは一般に考えられている

より、かなり早く、昭和六三年六月のある新聞によると、宮崎市沖で、午後八時ごろ、船火事のため、浮きのポリ玉につかまって漂流し、翌日午後二時半ごろ四国の足摺岬沖で救助されるまで一八時間半、黒潮の流れに乗ったわけであるが、幸いその漂流の距離が一六〇^キと記されてあったので、その流れの速度を計算したところ、約四、六ノットの速さということが分った。

ところで、このくらいの黒潮の速度であれば、東支那海を海流に乗って北上し、三、四日で九州に漂着することができたと推定される。そのように考察してみると、古い時代に、中国の長江流域の江南地方から南九州、特に、日向地方への文化の流入ということも、十分に考えられる。いづれにしても、中国の江南文化は、日本の古代文化に多大の影響を及ぼしている。例えば、柑橘類などにしても、長江中流域の三峡地帯（現地踏査一九八七年）が原産地になっているが、これも黒潮の交流を通じて西日本の太平洋沿岸地帯に伝わったものと考えられる。また、日本でも宮崎地方しか残存していない「ウグイ」といわれる竹籠製の漁具がある。この漁具は、池干しの時に使用され、上部は丸い穴があいているので、そこから手を差し入れて魚を捕る原始的な漁法である。古くは、中国の長江流域でも使用されたようであるが、東南アジアのカンボジア、ラオス、タ

イなどでは、最近までこの漁具が、使用されている。私は、インドネシアの博物館で観察したが、その時、その名称をたずねたら「WUWU」と呼称したので、宮崎地方での「ウグイ」の発音と類似しており興味深く思われた。なお、この「ウグイ」は同じ南九州でも鹿児島県内には存在しないとのことである。それから、同じくインドネシア、バリ島の稲作地帯で、原住民が使用していた刃だけ金属製の木製長方形包丁は、特に、日向地方の弥生遺跡だけか出土しない長方形石包丁（稲の穂刈り用具）と極めて類似していることも関心のもたれるところで、この長方形石包丁が西都原古墳群台地の新立遺跡から一七点も発見されていることは南方的黒潮文化の息吹きを強く感ずる。

さて、宮崎海岸には、『記・紀』にみえる禊みぎけら祓伝承地があり、そして、その地には、イザナギ、イザナミの両大神を祀る式内社としての江田神社が、千年有余の歴史を秘めて鎮座しているが、その社前を通っている山崎街道は、律令時代からの古代官道である。また、日の神信仰としての天照大御神の生誕伝承も伝わっているが、宮崎海岸から日向灘を真東に眺望した海洋信仰としては、最高の場所と思われる。そのような歴史的環境からみると、日向国は、東アジアに向って開けた玄関口であったといえるわけで、この海洋的な日向文化の融合がなければ、内陸的な畿内大

和国家の成立は、出来にくかったのかもしれない。

二、日向の大古墳群と西都原古代文化圏の形成

『記・紀』の神話伝承に彩られた日向の国には、前述したように、最も特色づけられるものとして、大古墳群の存在をあげることができる。

ところで、この日向の大古墳群については、最近の県教育委員会の現地調査において約一六〇〇基の高塚古墳の存在が確認されている。それに、墳丘をもたない約四〇〇基の特殊な地下式横穴墓群まで加えれば、約二〇〇〇基の大墳墓群の分布地帯ということになる。

それでは、これら日向地方に分布している高塚古墳としての大古墳群は、県内全域に広く分布しているのかというところ、そうではなく、主として宮崎県の中央平野部地帯に展開されているが、その中でも、特に、小丸川、一ツ瀬川、大淀川の三河川の中・下流域に沿って大群在している。まず、その中心をなす一ツ瀬川流域には西都原古墳群（三一基）、新田原古墳群（二〇六基）、それに茶臼原古墳群（五五基）、それから、小丸川左岸丘陵地には高鍋町の持田古墳群（八七基）、および川南古墳群（五五基）、さらに、宮崎市を流れる大淀川の中流域に本庄古墳群（五七基）、下流域に生目古墳群（四三基）、などの大古墳群が分布し

ていることになる。

それで、この平野部一帯には、県内全域に存在する約八割にあたる二〇〇有余基の古墳が所在していることになるが、注目されることは、その中に前方後円墳(柄鏡様式を含む)が約一五〇基も確認できることである。そしてさらに、この古代文化圏内には全長約一〇〇メートル以上の前方後円墳が約一〇基も所在している。

以上のように、西都市、児湯郡、東諸県郡、それに宮崎市、宮崎郡の平野部地域に展開する大古墳群地帯は、地域的には児湯郡の都農町、それに高鍋町、および川南町から西都市を経て国富町本庄、そして大淀川を下って宮崎市を結ぶ三角形の日向中央平野地帯の中心部に西都原古墳群が存在しているので、これまで、この中央平野部一帯に群集している大古墳群地帯を「西都原古代文化圏」と称してきた。

それから、この古代文化圏の地域は、ちょうど、日向の神話伝承の舞台になった地帯でもあり、その古代伝承の原点になる日向の式内四社のうち、三社がこの文化圏内に存在している。まず、前述した宮崎市海岸の江田神社、それから大己貴神を祀る都農神社および木花開耶姫を祀る都農神社などである。

なお、古代史的に考察すると、西都原古墳群地帯を中心

とする子湯^{こゆのあがた}県、それに、国富町本庄地域を拠点とした諸^{もろ}島の存在も、この古代文化圏内に認められる。

このように、この古代文化圏は、日向の古代文化を考究していく場合、極めて重要な地域といわなければならないが、また、この西都原古代文化圏を究明することによって、古代日本における大拠点であった古代日向の解明も可能になると思われる。

それでは次に、日向の平野地帯に展開している大古墳群について、その主な特色を以下述べてみることにする。

まず最初に取り上げたいのは、「前期様式の柄鏡式前方後円墳の存在」ということである。古墳時代の時期区分で、前期とは、大体四世紀代のことを意味し、五世紀代に入ると中期古墳と称されている。また、この柄鏡式前方後円墳というのは、前方部が細長く、高さも低く幅も狭い形式の古墳で、江戸時代ごろの女性が使用した柄鏡に似ているので、このように呼称されている。それで、この形式の古墳は、一般の前方後円墳の中でも、古式の年代に属する特殊形式の古墳であり、その分布地域は、全国のみでも、主として日向地方だけに見られる在地性の強い古式古墳である。ところで、大正初年に行われた西都原の一三号柄鏡式前方後円墳の発掘調査においては、内部構造および出土品の観点から、時期的に、四世紀後半代を下らないことが確認

できたが、現在、日向中央平野部地帯の古墳群の中には、この柄鏡式前方後円墳が約三〇基近くも所在している。そして、その中には、四世紀代に比定できる古墳も、かなり存在しているようであるので、そのようであれば、日向の古墳文化の時期的上限も、これまで一般に考えられてきた年代よりも遡ることになり、大和国家成立に関わる古代日向の歴史的背景についても、今後、さらに、検討を加えていかなければならない。

二つ目にあげたいのは、「大首長墓としての男狭穂塚と女狭穂塚」についてである。前項では、前期古墳としての柄鏡式前方後円墳が、日向地方特有の古墳であり、しかも、その分布地域が、日向中央平野部の三河川流域の古墳群地帯であることも、関心を寄せられるところであるが、さらに興味深いことは、この柄鏡式前方後円墳が最も密集している地域が、西都原古墳群を中心とした一ツ瀬川流域地帯であるということである。

ところで、中期古墳としての五世紀代の時期へ移行すると、それまで平野部の各古墳群にみられた首長墓的な柄鏡式の大形前方後円墳も次第に姿を消し、それに代って、西都原古墳群の中央部に突如として、大首長墓としての男狭穂塚および女狭穂塚が、その雄姿を現わしてくるのである。

この男狭穂、女狭穂の両塚は、いわゆる巨大古墳であり、男狭穂塚が全長二一九メートル、また女狭穂塚も全長一七四メートル、この両塚は、陵墓参考地に治定されている。それから、この両古墳の形式であるが、男狭穂塚は、その前方部の西側部分が整っておらず、墳形も明確に決めることはできないが、主墳丘としての後円部の径は一七八メートル。

また、その前方部は、前述した柄鏡式古墳の前方部のように、幅が狭く、高さも低く造られているので、この男狭穂塚は、極めて在地性の強い日向的な古墳であると思われる。また、この前方部にある不整形な土盛りなどについて関係当局者とともに調査した結果によると、この男狭穂塚の形式は、帆立貝式古墳とみなすことが妥当であると考えられる。いずれにしても、これだけの巨大古墳でありながら、全国的にみても墳形の明確でない古墳は珍しい。

それに引き替え、女狭穂塚は、男狭穂塚のすぐ南側に隣接して築造されている畿内型の典型的な大前方後円墳である。そしてその古墳のくびれ部の両側には、日向地方では珍しい造出しがついている。

それでは、この男狭穂、女狭穂両塚の築造年代について考えてみたい。そのことについては、この両古墳の西側にある陪塚からの出土品および女狭穂塚墳丘上からの出土埴輪などにより、大体、五世紀前半ごろに比定することがで

きるが、その際、両古墳の年代序列としては、男狹穗塚の方が時期的に先行すると思われる。

さて、この男狹穗塚、女狹穗塚のような巨大古墳は、全国的にみて、畿内地方（吉備地方を含む）以外には、存在しない西日本最大の古墳であり、日本の古代史上、注目される古墳である。

ところで、大首长墓としての男狹穗塚、女狹穗塚が、五世紀前半代に築造されたことは、その時期ごろに、日向王権の成立を認めることもできる。それで、西都原古墳群地帯には、この大首长権者の政治的本拠地が定められていたのかもしれないが、西都原台地の南端、三宅の地には、古くから「大王」という地名が伝えられ、また、三宅郷五邑の中に「大尾おおのお」があり、さらにその西都原台地上に平安末期には存在した三宅神社は、古く「覆野神社おほの」と称されていた。なお、そこから南の方に通じる律令時代の道路があるが、その名称も「尾筋」と呼ばれている。それから、この三宅神社のすぐ南の所には、『日本書紀』に記載されている景行天皇ゆかりの「丹蒙小野にものおの」伝承地が古くから存在していることも関心をそられることがらである。

また、この両塚については、古くから、男狹穗塚は天孫瓊々杵尊、女狹穗塚はその妃木花開耶姫命をそれぞれ祀るという伝承が伝わっているが、応永元年（一三九四年）三

月の三宅神社の記録の中に、三大祭典の一つとして、同神社主催の山陵祭が執り行われたことが記されている。そしてその記録では、一〇月一日と一月初卯の日に並び行われと記載されているので、一〇月一日が男狹穗塚、一月初卯の日が女狹穗塚に対しての祭祀行事であったと思う。現在、催されている西都原古墳祭は、一二月の女狹穗塚の祭典場の場所で行われている。

それから、男狹穗塚のすぐ西側にある一六九号墳から出土し、国の重要文化財に指定されている舟形埴輪と子持家形埴輪についてふれてみたい。この日向の大首长墓である男狹穗塚の陪塚から、西都原古墳文化を象徴する舟形埴輪と子持家形埴輪が出土したことは注目されるところであるが、特に、この貴重な形象埴輪が、この巨大古墳に埋葬される時期が大和王国との関わりの中で日向王国が成立する時であるので、さらに、興味深く思われる。

まず舟形埴輪であるが、この埴輪は、大正初年の西都原古墳発掘調査の際、一六九号円形墳から出土したものであるが、準構造船の形式が取り入れられ、このような船であれば、恐らく、朝鮮半島から中国大陸沿岸は航行できたと思われる。また、この舟形埴輪は、ほかの地域では、ほとんど発見されることがなく、主として畿内地方だけに類似の埴輪が出土している。そして、この舟形埴輪で、まず連

想されることは、古代日向に相応しい極めて海洋的な埴輪であるということである。

一方、同じ古墳から出土した子持家形埴輪は、竪穴式入母屋造の母屋を中心に、前後、両側に四軒の平床式家形埴輪が付着された特異な複合家形埴輪である。このような特殊形式の子持家形埴輪は、現在までのところ、西都原古墳群以外には出土した例がなく、その意味では、全く西都原特有の埴輪ということになる。それでは、この特殊形式の埴輪は、住居用の建物かといえ、どうもそうではなく、大室屋として信仰儀礼に関連のある建物を表現しているのではないかと思われる。

三つ目に「日向地方独特の地下式横穴墓群」について述べてみたい。一般に古墳と称される場合は、地上に土盛りをつくり、その封土の中に被葬者（主体部）を埋葬する墓制で、北方系の民族信仰に源流をもつものであるが、ここでふれる地下式横穴墓は、前述した古墳とは対しよ的に、地下に墓穴を構築して被葬者を埋葬する墓制である。それで、主体者としての被葬者を、地上に葬るか、地下に葬るかは、民族信仰の上からも、根本的に異なるわけで、その意味では、垂平的神観念に基づく海洋信仰に関わりの深い特殊墓制といえる。しかし、ごくわずかではあるが、この地下式横穴墓の上部に墳丘を伴う複合式の地下式横穴墓が確

認されることもある。

それでは、この地下式横穴墓の分布状況につき述べてみることにする。その際、特に、関心を寄せられることは、この特殊墓制の地下式横穴墓が、主として、日向地域、だけか所在しないということである。そして、その分布地帯は、宮崎県の中央部以南の地域と鹿児島県の一部を含んだ地域ということになるが、その中で注目されることは、その北限地域が、西都原古墳群などが存在する一ツ瀬川流域地帯であるということである。

大体、西都原地域から国富町を通り、南西部の内陸地帯を、古代交通路に沿って野尻町および市の市一帯が分布地域になっているが、さらに旧日向の地であった大隅地方の大口盆地と肝属川流域地帯まで広がっている。最近までの宮崎県内での地下式横穴墓の発見例は、約四〇〇基を数えることができるが、鹿児島県内の大隅半島一帯でも約一〇〇基有余を確認している。ところで、この地下式横穴墓には、どのような人達が葬られているのかということであるが、埋葬儀礼的な観点からしても、土中信仰をもつ海洋的な海人族集団の人びとが被葬者である可能性が強い。

次に、この地下式横穴墓がつくられた時期について考えてみたい。まず、その墓制について編年を考察する場合は、その内部構造および出土品などにつき検討せねばならない

が、これまでに発掘調査された地下式横穴墓で、最古の時期として、五世紀半ばごろに推定できるのは、西都原四号地下式横穴墓（一九五六年調査）であるが、この四号地下式墓は、内部形態が大規模で、妻入長方形型の玄室（全長五、五^分）をもち、副葬品としても、鉄製短甲三領が埋納されていた。なお、この初現期の地下式墓としては一九四二年に発掘調査された国富町六野原の八号および一〇号地下式横穴墓があるが、六世紀代に入ると玄室形態が平入様式に変わり、そして宮崎県内の地下式横穴墓は、大体、七世紀前半ごろの飛鳥時代ごろをもってその築造を終るのである。

ところで、この地下式横穴墓を隼人族に関連づけている説があるけれども、隼人が南九州の薩摩、大隅地方で、歴史上に見えてくるようになるのは、七世紀後半の天武天皇以後とされるので、五世紀半ばころから始まり、七世紀前半には、その築造を終る約四〇〇基の宮崎県内の地下式横穴墓は、隼人族と直接の関わり合いはないと思われる。

それでは、最後に、西都原古墳群の中に所在する「日本でも特異な鬼の窟古墳」について述べる。この古墳は、西都原古墳群のほぼ中央部に位置し、そのすぐ北の方には、巨大古墳としての男狭穂、女狭穂の両塚が望まれる。この鬼の窟古墳は、径が約三七^分、高さ約七^分の大形の円形墳

であるが、内部構造としては、本古墳群中、唯一の横穴式石室（全長約一〇^分）が真南に開口している。

ところで、この古墳が、全国の古墳の中で特異とされるゆえんは、この墳丘の周囲に土塁が巡らされていることである。このように円形墳に完全な土塁が設けられている古墳は、全国的みても類例がなく、極めて貴重な石室墳といわれているが、さらに興味あることは、この横穴式石室の内部構造が、全く、畿内大和形式のものであるということである。そのように考察できるとすれば、この鬼の窟古墳は、大和地方と交流の中で築造されたことになる。それから、宮崎県内では、この畿内系の横穴式石室をもつ古墳がもう一基存在する。その古墳は、西都原古墳群台地から東の方に眺望できる茶臼原台地の西麓に所在する前方後円墳形式の千畑古墳である。

それからこの鬼の窟古墳の築造年代であるが、最近、二回にわたり行われた調査結果によると、六世紀末葉から七世紀初頭ごろにかけての年代に比定される。この時期は、ちょうど、大和王朝では飛鳥時代に相当する。

前述したように、土塁を巡らす古墳は、ほかに類例がないけれども、方形墳であれば、類似の古墳をあげることができる。それは奈良県明日香村に所在する石舞台古墳である。この古墳は、飛鳥時代を象徴する方形墳であり、周囲

に土堤をめぐらす横穴式石室墳として大和を代表する墳墓の一つになつてゐる。また、この古墳については古くから、蘇我馬子の墓という伝承も伝わつてゐる。

ここで、特に関心を引かれることは、この石舞台古墳と同一形式の古墳が、もう一基西都原周辺に所在することである。それは西都市内上三財の台地上に存在する常心塚古墳である。この古墳は、墳丘の一边が、石舞台古墳の約四分の一の二四呎であるが、その墳丘の周囲には、石舞台古墳と同じく土堤が巡らされてゐる。なお、この古墳の内部構造については、未調査のため不明であるが、墳頂部に大石の一部が確認できるので、横穴式石室墳であると推測される。また、大和の石舞台古墳および西都市の常心塚古墳は、ともに築造年代は、七世紀前半ごろに推定される。

それから、前述したように大和の石舞台古墳の被葬者は、伝承的に蘇我馬子の墳墓であるといわれているが、最近の調査（石舞台古墳『探訪日本の古墳西日本編』）でも、その可能性は十分に認められるとのことである。

そのようであれば、墓制的に全く類似している三財の常心塚古墳および西都原の鬼の窟古墳の被葬者も、大和の蘇我氏に極めて関わりの深い氏族であつたと考えられる。

ところで、常心塚古墳のある三財に隣接する平郡の地は、平安時代の『和名抄』にみえる兎湯郡の「平郡郷」であり、

この地域には、全長約一〇〇呎の松本古墳（前方後円墳）をはじめ三納古墳群も分布しており、また、古く平群氏の本拠になつた地域かもしれない。なお、『古事記』の孝元天皇、建内宿禰の段によると、蘇我氏は、平群氏や葛城氏などとは同族となつてゐる。

三、天孫降臨説話と襲のクニ

天孫降臨説話は、日向神話の中の大きな柱の一つとして、注目しなければならぬが、特に、『日本書紀』には、その本文および「一書」の第四、第六の記事の中に、それぞれ「日向の襲の高千穂」という文句が見える。それでは、以下、この襲の地に降臨したという説話の「襲」（以下、襲を「ソ」と記す）のことについてふれてみたい。この「ソ」のことに關して、書紀編纂時の関係者は、伝聞していたかどうか分らないが、平安時代初期の弘仁六年（八一五年）に撰述された『新撰姓氏録』の序には、「蓋し聞く。天孫、襲に降り、西化の時」と記され、日向とか、高千穂というような名称はなく、ただ、「襲」という文字がみえるだけである。それで、そのことから考えられることは、『新撰姓氏録』の編纂者たちは、この「ソ」についての古い伝承を諸氏族から伝え聞いていたのかもしれない。それから、この「ソ」の意味であるが、『広辞苑』によると、

「ソ」は背を表わし、「せなか」の意味であると説明されている。

ところで、次に、この「ソ」に関するところで、興味深いことを知った。それは筆者が、昭和三〇年ごろ、宮崎県西都市の東米良地方における狩猟習俗調査(『狩猟習俗II』文化庁文化財保護部)の中で、『書紀』の天孫降臨説話にみえる「そじし」という文言と全く同じ狩詞^{かりこば}が、その当時使用されていたことに驚嘆したが、狩人から聞いたところでは「そじし」は猪の背骨に付着している肉で、極めて美味しく、牛肉でいえばロースに匹敵することであった。柳田国男氏の『後狩詞記』の中では、「ソシ」という狩詞は、最もまずいと記されている。どうして、そのようなことになったのか、経緯はよくわからない。そして、津田左右吉氏も、『日本古典の研究上』の中で、まずいという意味をとられて、未開発地で、物資の供給も不十分で文化の発達もひどく後れていた日向のような僻地が、どうして皇室の発祥地であり得たかと記されている。それでは、この「ソ」と称せられた地域は、おおよそ、どの一带かということであるが、宮崎県の西北部の高千穂地方から熊本県阿蘇郡地域それに大分県直入群一帯の九州中央山地の地域と考えられる。

さて、この「ソ」という地域のことを、文献史上で初見

されるのは、「景行天皇紀」の熊襲征討の條の中の「襲国」である。「景行紀」一二年の記事では「朕聞く、襲国に厚鹿文、^{あつかや}^{なきかや}鹿文といふ者有り。是の兩人は熊襲の渠帥者なり」と、さらに、同一三年では「悉に襲国を平けつ」と記されている。以上「朕聞く、襲国に……」から始まる記述では、「クマソ」が「ソのクニ」の部分的な一地域を表わしているものと考えることができ、また「悉に襲国を平けつ」の記事の「悉に(ことごとく)」という意味から考察しても、「ソのクニ」が広い地域であり、「クマソ」がその中にある部分を指していることが察知できる。

ところで、文献などにみえる「ソ」と称される地名をあげてみると、「襲の高千穂」(『書紀』)、阿蘇国(『景行天皇紀』)、阿蘇山(『景行天皇紀』「北史倭国伝」「隋書倭国伝」)、肥後国阿蘇郡阿蘇(『和名抄』)、大隅国贈於郡曾乃峯(『続日本紀』)、大隅国嘯唳郡(『和名抄』)などがある。さらに、現在でも、大分県直入郡阿蘇野、宮崎県西臼杵郡祖母山、北諸県郡旧西岳村荒襲(現、都城市)、鹿児島県始良郡旧東・西襲山村(現、国分市・隼人町)などのように、各所に「ソ」という地名が残存している。このように、「ソ」のつく地名の分布地帯から考察すると、だいたい「ソ」という地名のついでている地域は、日向の北西部の高千穂一帯から阿蘇山周辺地帯と、大隅国北東部の霧島山周

辺一带ということになる。すなわち、北の方、阿蘇山、祖母山を中心とする地域と、霧島山を中心とする地域の二つに大きく分けることができる。現在、「ソ」のつく地名が、北の方より南の方の大隅一帯に、より多く残存していることは、「ソのクニ」の中心地帯が、その後次第に、南の方へ移動していったのではないかと考えられる。特に、大和朝廷において、『記・紀』の編纂が行われた奈良時代初頭ごろには、「ソ」とつく地名は、大隅地域に限定されていたようである。

次に、この「ソ」の名称がつく日向古代説話で、『記・紀』にみえない注目すべき史料についてふれてみたい。それは、賀茂社のことについて記載された『山城国風土記』逸文に、「可茂と称ふは、日向の曾の峯に天降りましし神、賀茂建角身命、神倭石余比古の御前に立ちまして、大倭の葛木山の峯に宿りまし、彼より漸に遷りて、山代の国の岡田の賀茂に至りたまひ……」とある記事についてである。それでこの説話は、カモの神が日向の「ソ」の峯に天降りされて、さらに、大和の葛木山へいかれる内容のものであるが、ここでは、ただ「日向の曾の峯」と記されているだけで、高千穂などの名称は見えない。そしてこの逸文で特に興味深いことは、日向と葛城との関連についてふれられていることである。

それでは、ここで日向と葛城に関わりの深い葛城襲津彦について述べてみたい。まず、元東京大学教授であった井上光貞氏は、『日本国家の起源』（一九六〇年）の中で、氏族としては、史上最初の史実性に富む人物名として高く評価され、同書において、「葛城ソツ彦は、不可知の世界から忽然としてあらわれてくる感を与えるのである」と結ばれている。

ところでこの葛城襲津彦については、襲津彦の上に葛城がついているので、これをどのように解釈するかということであるが、『書紀』に記載されている関連の記事および「神功皇后紀」六二年の『百濟記』にみえる「沙至比脆」名などから考察して、その原初的な人物名は、「ソツ彦」であったと思われる。そうであれば、「ソツ彦」とは、「ソの首長」という意味であり、九州中央山地を中心にして文化圏を形成したと推測される「ソのクニ」と極めて密接な関係にあった人物と推定される。しかし、その人名の上に、葛城という名称が付いているので大和の葛城地方でも勢力をもった人物であろう。そして、葛城ソツ彦の女、磐之媛は仁徳天皇の皇后になり、履中、反正、允恭の三天皇が誕生されるが、一方、仁徳天皇の後妃としては、日向の諸県君牛諸井の女、髪長媛が入内され、日向系皇統も成立するのである。

さて、これまで「ソのクニ」文化圏地帯が大和地方と関連をもっていることについて述べてきたが、さらに、この地域には、大和国家成立に際して、関わりのある民族伝承が伝わっている。その古い伝承とは、豊後と日向の国境に存在する祖母山にまつわる姥岳伝承である。その説話内容については、『平家物語』および『源平盛衰記』などに記載されているが、一方、この姥岳伝承と類似した三輪山説話が、奈良平野の東南部に、大神神社のご神体である三輪山を背景にして伝承されている。そして、関心をそそられることは、鳥居龍蔵氏が朝鮮民主主義人民共和国の咸鏡北道で採録された三輪山説話的民族伝承（『有史以前の日本』一九二五年）の存在である。

ところで、この三者を比較すると、朝鮮半島最北部の民族伝承と東九州山地の姥岳伝承は、全く同一類型のものであることが了解されたが、大和の三輪山説話においては、その説話の後半において、かなりの変容が認められるので、必然的に、日向の姥岳伝承が、大和の三輪山の方へ伝播していったのではないかと推測される。そして、この民族伝承にまつわる大和の大神神社と日向の都農神社は、ともに、同一祭神の大己貴神（大物主神）を祀り、また、ともに、同国の式内一の宮の社格を有していることは注目すべきこととがらである。

四、豊日文化の形成とその考察

『古事記』上巻のイザナギ、イザナミ両神による九州の国生み伝承では、次のように記されている。「次に筑紫島を生みき。此の島も亦、身一つにして面四つ有り、面毎に名有り。筑紫国は白日別と謂ひ、豊国は豊日別と謂ひ、肥国は建日向日豊久士比泥別と謂ひ、熊曾国は建日別と謂ふ」この記事で、面四つの中の日向の名称がみえないので、この記載については古い時代から論議をかもしてきたが、そのことにつき、津田左右吉氏は、『日本古典の研究』上、第二章において、日向国がみえないので、それは熊曾国に入れるべきだとして次のように記述されている。「さて、ツクシ（狭義）、トヨ、ヒの三国は、廣義のツクシの北半をなすものであるから、残りの一つのクマソは其の南半をなすもの、即ち今の日向、大隅、薩摩の地方に当るのであろう。云々」と。

このように、津田氏が、面四つ伝承の中に、日向国が見えないので、それは、クマソの国の中に包括されているのであるという見解は、その後、津田史学のクマソ論として、現在でも踏襲されている。

ところで、私は、この面四つと日向国との関係について、日向国は、「豊国」の中に含まれていると思つている。そ

れでは、日向国が「豊のクニ」に包含されていたとする根拠について述べることにするが、紙面の都合上、その概要だけを説明したい。まず、日向のどの地域を「豊のクニ」と称していたのだろうか、その場合考えられることは、宮崎県の中央部を流れる大淀川流域以北の平野部一帯の地域をあてることができるが、また、その地域は、前述したように、日向の大古墳群が分布している西都原古代文化圏の地域でもある。しかし、この日向の地域をも包含した「豊のクニ」と豊後国だけの「豊のクニ」と混同されないために、日向の地域も含んだ「豊のクニ」の方を、「豊日文化圏」と称することになっている。それで、この豊日文化圏とは、日向の中央部以北の地域と豊後のクニを包括した東九州文化圏とも称することができる。

それではまず、豊日文化圏の東九州一帯の地域に、弥生時代終末（三世紀末前後）から古墳時代初期にかけて、二重口縁の壺に、櫛描波状文を施した豊日文化圏特有の弥生土器が出土することになる。この櫛描文弥生土器は、国東半島から宮崎平野まで分布しているが、特に、日向の大古墳群地帯の三河川流域に濃密な分布をみることができよう。

次に、古く、「豊のクニ」と称されていたのではないかと推察されるもう一つの裏付けとして「豊国別王」の出現を取りあげたい。「書紀」の景行天皇一三年の條には

「因りて高屋宮に居しますこと、已に六年なり。是に、其の国に佳人有り。御刀媛といふ。則ち召して妃としたまふ。豊国別皇子を生めり。是、日向国造の始祖なり」とあるが、また、『古事記』にも「日向之美波迦斯毘賣を娶して生みませる御子豊国別王」、そして、さらに「豊国別王は日向国」と記されている。

このように、豊国別王につき、『古事記』と『書紀』ともに、同一の記載がある場合は、かなり実証性のある記事と思われるが、日向の首長を豊国別王と称したのは、当時、この地域を「豊」と称していたからであろう。

また、「別」の称号をもつ豊国別王は、日向の国造としての日向国の支配者になるが、さらに、大首長として日向王権の成立をみることにになり、その勢力は、大首長墓としての男狭穂塚の築造に深い関わりをもつことになるのかもしれない。

それでは最後に、豊日文化圏に関連のある「珍彦」説話について述べてみたい。この珍彦伝承については、『古事記』と『日本書紀』の神武東征記事の中で、ともに記されているが、『書紀』では、日向を出発した神武天皇一行が、豊後の速吸之門（佐賀関）において海人族の珍彦に出会い、海道案内者として、珍彦が一行を導いて大和へ進んだが、その珍彦（椎根津彦）が「倭直部の始祖」であるとき

れ、また『古事記』では、「倭国造等の祖」とされ、その子孫が、国造として大和の支配者となったと記されている。このように、海人族としての珍彦が、大和王国の本拠地において大きな勢力をもつことになるのは、豊日文化の東漸というような観点からでも注目されることからである。

(宮崎大会の公開講演内容)

参考文献

日高正晴『古代日向の国』NHKブックス、一九九三年
四月